

# 英語と日本語における「理解」の概念メタファー

## Conceptual Metaphors of Understanding in English and Japanese

松 井 真 人

Mahito Matsui

要旨：本稿は、「理解」という抽象概念に関わる英語と日本語のメタファー表現を分析し、両言語においてその概念がどのような概念メタファーによって意味づけされているかを考察した。その結果、「理解」という概念は、英語と日本語において数多くのほぼ同じ種類の身体的活動に関連づけられて概念化されていることが明らかになった。また「理解」に関する概念メタファーが、どのような経験的基盤に基づいて生じたのかという問題も考察した。そして結論として、類型論的に全く関係がない言語である英語と日本語の間で「理解」に関する数多くの概念メタファーが共通しているということは、これらのメタファーが普遍的である可能性が高いということを述べた。

キーワード：理解、概念メタファー、概念化、経験的基盤、普遍性

### 1. 序論

本稿は英語と日本語のメタファー表現を分析し、「理解」という抽象概念が英語話者と日本語話者によってどのように意味づけられ、認知されているかを明らかにする。Lakoff and Johnson (1980) 以来の認知言語学的なメタファー論では、メタファーは単なる装飾的な言語表現ではないと考えられている。Lakoff and Johnson (1980:5) によると、メタファーの本質は、“understanding and experiencing one kind of thing in terms of another” であり、メタファーは人間が外界を理解し意味づけするために用いる重要な認知的方略の一つである。さらなる理論の進展により、現在のメタファーの代表的な定義は “a cross-domain mapping in the conceptual system” (Lakoff 1993:203) である。すなわちメタファーは異なる概念領域間の写像である。写像 (mapping) とは、起点領域 (source domain) と目標領域 (target domain) という異なる2つの概念を構成している諸要素間の一連の対応関係 (the set of correspondences) のことである。これらの定義を考え合わせると、メタファーとは起点領域と目標領域という2つの概念を対応させることによって、前者で後者を理解するという認知的な営みであるということになる。したがって、ここでいうメタファーは概念レベルのメタファー (conceptual metaphor) であり、概念メタファーはそこから派生された言語表現としてのメタファー表現 (metaphorical expression) から明確に区別されなければならない。

以上のような認知言語学におけるメタファーに関する理論的発展と並行して、様々な概念領域におけるメタファーの事例研究や、異言語間の概念メタファーの比較研究が行われ、メタファーの普遍性と文化的変異の問題についても研究が進んできた (Kövecses 2000, 2005など)。本稿も認知言語学的な視点からの概念メタファーの事例研究であり、英語と日本語のメタファー表現を分析することによって、理解 (understanding) という心的活動をそれぞれの言語の話者がどのように捉え、概念化しているかを明らかにする。そして「理解」の概念

メタファーに関して、類型論的に全く関係がない英語と日本語の間にどの程度の共通性と差異があるかという問題や、「理解」の概念メタファーを生み出す経験的基盤を考察し、その考察を基にしてこのメタファーの普遍性について論ずる。

## 2. 英語における「理解」の概念メタファー

本章では、主に Deignan (1995)、Lakoff and Johnson (1980)、Lakoff, Espenson and Schwartz (1991)、Olaf (1995) を参考にして、英語における「理解」のメタファーを考察する。まず重要なのは、IDEAS ARE SOLID OBJECTS という存在のメタファー (ontological metaphor) である<sup>1</sup>。(1a-e) のメタファー表現が示すように、この概念メタファーによって、「理解」の対象となる「考え」が物理的な「物」と見なされる<sup>2</sup>。

### (1) IDEAS ARE SOLID OBJECTS

- a. What's the *matter*?
- b. It is difficult for unilateralists to admit there is *another side to the missile question*.
- c. That is a very *hard question* to answer.
- d. It's a *tough problem*.
- e. Let us turn to less *weighty matters*.

(1) の概念メタファーが上位のメタファーとなり、そこから以下に挙げるような、「物」に対する様々な身体的活動として「理解」を捉える下位の概念メタファーが生ずる。まず (2a) が示すように、「理解」は「物を捕まえること」として概念化される。さらに (2b-i) は、捕まえる「物」が、魚などの動物や落ち穂や枯れ葉など見なされる場合があることを示している。

### (2) UNDERSTANDING IS CATCHING

- a. I don't quite *catch* the idea.
- b. He *took a stab* at the answer.
- c. He *took aim* at the problem.
- d. He *cast about* for ideas.
- e. He has been *fishing for* the answer for weeks.
- f. Much of the information he *gleaned* was of no practical use.
- g. He *unearthed* the answer.
- h. The reporter had *raked* out some interesting facts.
- i. We'll have to *go over* it with a *fine tooth-comb*.

次に、(3a-d) が示すように「理解」は「物を得ること」として概念化されることがある。

### (3) UNDERSTANDING IS GETTING OBJECTS

- a. I don't *get* you.

<sup>1</sup> 存在のメタファーについての詳しい議論は Lakoff and Johnson (1980) の第6章を参照。

<sup>2</sup> 以下において概念メタファーとメタファー表現を区別するために、前者は大文字で表記する。また、ここに挙げられている英語のメタファー表現は Lakoff and Johnson (1980)、Lakoff, Espenson and Schwartz (1991)、Olaf (1995)、Hornby (2010) から取ったものである。用例のイタリックは本稿の筆者によるものもある。

- b. She didn't *get* the joke.
- c. I don't *get* it?—why would she do a thing like that?
- d. I *get* the message—you don't want me to come.

また、(4a-e) が示すように「理解」は「物を握ること」として概念化されることもある。

(4) UNDERSTANDING IS GRASPING

- a. The concepts were difficult to *grasp*.
- b. We have not yet come to *grips* with it.
- c. It's not that easy to *seize* upon an idea.
- d. I *take* your meaning.
- e. Once one has *got hold of* certain basic facts the rest is completely easy.

さらに、(5a-c) は「理解」が「物を拾うこと」として概念化されていることを示している。

(5) UNDERSTANDING IS PICKING UP OBJECTS

- a. This has not been *raised* as an issue by the West.
- b. Where did you *pick up* such *ideas*?
- c. I *take up* one *problem* at a time.

(6a-d) では、「理解」は「物を入れること」とであると捉えられている。

(6) UNDERSTANDING IS TAKING IN

- a. I *took in* everything I was told.
- b. They listened to my lecture, but how much did they *take in*, I wonder!
- c. I can't *get* this Latin grammar *into* my head.
- d. *Taking* everything *into consideration*, the result is better than I expected.

さらに、(7a-c) が示すように「理解」を「物理的に支配すること」として捉える概念メタファーがある。

(7) UNDERSTANDING IS GAINING PHYSICAL CONTROL OVER THE MATERIAL

- a. She wasn't able to *tackle* all the material, so he stayed behind.
- b. He successfully *conquered* the material.
- c. He has *command* over the material.

また (8a-d) では IDEAS ARE FOOD という概念メタファーによって「考え」が「食物」として概念化されており、この概念メタファーが上位のメタファーとなり、そこから、(9) や (10) のような「理解」を「食べること」や「消化」に見立てる下位の概念メタファーが派生している。

(8) IDEAS ARE FOOD

- a. What he said *left a bad taste in my mouth*.

- b. All this paper has in it are *raw facts, half-baked ideas, and warmed over theories.*
- c. That class gave me *food for thought.*
- d. She gave us some *brain food.*

(9) UNDERSTANDING IS EATING

- a. They *ate* the lesson *up*.
- b. They *gobbled up* the ideas

(10) UNDERSTANDING IS DIGESTION

- a. It'll take some time to *digest* that information.

(11) は、「理解」を「見ること」として捉える視覚に基づく概念メタファーである。

(11) UNDERSTANDING IS SEEING

- a. I *see* what you're saying.
- b. It *looks* different from my point of view.
- c. What is your *outlook* on that?
- d. I *view* it differently.
- e. I've got the *whole picture.*

(12a-d) では「理解」は「読むこと」として概念化されている。

(12) UNDERSTANDING IS READING

- a. I wasn't sure how to *read* his silence.
- b. She shook her head, and I *read* this as a refusal.
- c. The poem can be *read* as a protest against war.
- d. He had accurately *read* the mood of the nation.

最後に、(13a) が示すように「理解」は「ほどくこと」として概念化されることがある。

(13) UNDERSTANDING IS UNRAVELING

- a. The discovery will help scientists *unravel* the mystery of the Ice Age.

以上が英語における「理解」を概念化する主要なメタファーである。これらのメタファーの分析から言えることは、英語においては「理解」は様々な身体的活動に見立てられて概念化されているということである。すべての場合において、「理解」の対象となる「考え」が魚や食物など様々な種類の「物」と見なされ、(2) から (5) は「物を自分の体の近くに保持しておくこと」、(6) は「物を何かの中に入れること」、(7) は「物に対する支配権を得ること」、(9) は「食物を食べること」、(10) は「食物を消化すること」、(11) は「物を見ること」、(12) は「読むこと」、そして (13) は「ほどくこと」として「理解」が概念化されている。

### 3. 日本語における「理解」の概念メタファー

本章では、「理解」に関する日本語のメタファー表現を考察し、それらの表現を派生している概念メタファーを抽出することを試みる<sup>3</sup>。

英語の場合と同じように、日本語でも、「理解」の対象となる「考え」が存在のメタファーによって「物」と見なされる。そして「理解」は「物」に対して加えられる様々な身体的活動として概念化される。まず、「理解」には「解」という字が入っており、「風流を解する人」「彼の態度は解せない」などの表現もあるが、このような表現においては、結ばれた「紐」として概念化された「考え」を「ほどくこと」というイメージで「理解」が捉えられている。「理解」の類語で「解」の文字が入っている表現としては、「半解」「誤解」「曲解」などがある。また、「理解する」の類語として「知る」があるが、大野・浜西（1981:369）によると、「知る」は「領（し）る」と同源であり、物事を全体にわたって支配し認識することが基本の意味とのことである。このような「理解することはほどくことである」「理解することは支配することである」という概念メタファーの他にも、以下のような「理解」に関する概念メタファーがある。

理解することは区別することである

その語の意味が分かる。  
分かりのいい男  
彼は物分かりが速い。  
分別のある人

理解することは取ることである

僕の言ったことを悪く取るなよ。  
この文章はそうも取る。  
言葉の意味を取り違える。

理解することは捕まえることである

この言葉の意味をどう捕えるかによって解釈が違ってくる。  
彼の本意は捕捉しがたい。

理解することは握ることである

文章の大意を握む。  
実態を把握する。  
文意を把捉することが難しい。

理解することは得ることである

お世辞をまともに受け取る。  
多少料理を心得ている。  
得心のいくまで話し合う。

<sup>3</sup> 以下において、概念メタファーとメタファー表現を区別するために、前者はゴシック体で表記する。メタファー表現は主に大野・浜西（1981）と柴田・山田（編）（2002）から取ったものであるが、一部インターネット上のウェブサイトから取ったものもある。用例の下線は本稿の筆者によるものである。

それを聞いてやっとな納得がいった。  
真理を自得する。  
いろいろやってみて勉強の要領を体得する。  
人生の何たるかを感得する。

理解することは入れることである。  
内容がさっぱり頭に入らない。  
言うことが腑に落ちない。  
内容がどうも腹に落ちない。

理解することは食べること、または飲む（呑む）ことである  
話の要点を十分に飲み込む。  
彼は呑み込みが早い。  
芸の神髄を味得する。  
早呑み込みをする癖がある。  
話を丸呑みにする。  
参考書の説明を鵜呑みにする。

理解することは消化することである  
新技術を消化する。  
学ぶ内容を消化できない。

理解することは見ることである  
人の心を見抜く。  
相手の計画を見通す。  
変装を見破る。  
内幕を見透かす。  
実験の結果を見定める。  
事業の現状を見極める。

理解することは読むことである  
彼の本心が読めた。  
人の心中を読む。

以上が日本語における主要な「理解」の概念メタファーである。これらの概念メタファーの分析から、英語の場合と同じように、日本語でも「理解」という概念は、様々な身体的活動に関わる概念に対応づけられて理解されていると言える。

#### 4. 「理解」の概念メタファーに関する日英語間の共通性と差異及び経験的基盤

英語と日本語は類型論的に全く関係のない言語である。このような系統が異なる言語間で概念メタファーが共通していれば、そのメタファーは普遍的である可能性が高い。さらに日英語間の概念メタファーの共通性にはそれぞれの言語の話者（おそらくは多くの人間）の認識の共通性が反映していると考えてよいのであり、またそのようなメタファーが成立するための（おそらくは多くの人間に共通の）動機づけ、すなわち2つの概念間の写像関係が成立するための経験的基盤（experiential basis）があるはずである。日英語間で概念メタファーに違いがあれば、そのような違いを生み出す文化的な原因を見出すことができるかもしれないし、もしそれができなくても、それぞれの言語の概念メタファーを生み出す経験的基盤があるはずである。本章では、これまでに考察した英語と日本語の「理解」の概念メタファーを比較検討し、その共通性と差異及び経験的基盤について考察する。

ここで、2章と3章で分析した概念メタファーをもう一度挙げておく。

##### <英語における「理解」の概念メタファー>

UNDERSTANDING IS CATCHING  
UNDERSTANDING IS GETTING OBJECTS  
UNDERSTANDING IS GRASPING  
UNDERSTANDING IS PICKING UP OBJECTS  
UNDERSTANDING IS TAKING IN  
UNDERSTANDING IS GAINING PHYSICAL CONTROL OVER THE MATERIAL  
UNDERSTANDING IS EATING  
UNDERSTANDING IS DIGESTION  
UNDERSTANDING IS SEEING  
UNDERSTANDING IS READING  
UNDERSTANDING IS UNRAVELING

##### <日本語における「理解」の概念メタファー>

理解することはほどこことである  
理解することは支配することである  
理解することは区別することである  
理解することは取ることである  
理解することは捕まえることである  
理解することは握ることである  
理解することは得ることである  
理解することは入れることである。  
理解することは食べること、または飲む（呑む）ことである  
理解することは消化することである  
理解することは見ることである  
理解することは読むことである

日英語間で共通する「理解」の概念メタファーを見ていくと、まず CATCHING と「捕まえること」を起点領域とするメタファーが共通しているが、これらのメタファーに共通する経験的基盤は、何かを捕まえればそれが捕まえた人の手元に残り、手元にあれば遠くにある

場合よりも観察が容易になるので、それについての情報が得やすいということであろう。つまりこれらは、捕まえることと理解することがしばしば同時に起こるという日常経験に基いて成立した概念メタファーであると考えられるので、「共起性 (cooccurrence) に基づくメタファー」である<sup>4</sup>。

GRASPING と「握ること」を起点領域とする概念メタファーも「捕まえること」を起点領域とする概念メタファーと全く同じ経験的基盤によるものであると考えられる。

PICKING UP OBJECTS と「取ること」、GETTING OBJECTS と「得ること」もほぼ同じ起点領域である。これらを含むメタファーも、物を手に取ることによって、また得ることによって、それが自分に近づき、それに対する理解が容易になるという経験が基盤になっていると考えられるので共起性に基づく概念メタファーである。

次に GAINING PHYSICAL CONTROL OVER THE MATERIAL と「支配すること」を起点領域とする概念メタファーが共通している。これらのメタファーは、自分の支配の外に在って自由に活動している物よりも、支配の下にあって活動が制御されている物の方が観察しやすく、それについての情報が得やすいということが経験的基盤となっていると思われるので、支配することと理解することの共起性に基づく概念メタファーである。

英語には「理解」を EATING として概念化するメタファーがある。この概念メタファーは、理解の対象となる「考え」を「食物」として概念化する IDEAS ARE FOOD という上位メタファーから派生する下位メタファーであると考えられる。IDEAS ARE FOOD は、考えと食物が、それぞれ精神と身体の活動の源となるという類似性に基づいて成立した概念メタファーだと考えられる。そして EATING を起点領域とするメタファーは、考えを外側から自分の心の中に入れることを、食物を体内に取り込むことに見立てて理解することによって成立した類似性に基づく概念メタファーである。日本語にも「丸呑み」「鵜呑み」という表現があるので、英語の EATING を起点領域とするメタファーと同じように「理解」を「食べること」として捉える概念メタファーが存在すると考えられる。しかし日本語では、「話の要点を十分に飲み込む」という表現が示しているように、「考え」が「飲み物」として捉えられ、「理解」が「飲むこと」として概念化されていると解釈できる場合もある。

次に、DIGESTION と「消化すること」という起点領域を含む概念メタファーも日英語間で共通している。これも EATING や「食べること」を起点領域とする概念メタファーと同じように、IDEAS ARE FOOD という上位メタファーから派生した下位メタファーであると言えるだろう。「消化」を起点領域とするメタファーは、理解することによって考えが人の心に取り込まれるありさまを、食物が消化されることによって人の体に吸収されることに見立てて認識する、類似性に基づく概念メタファーである。

次に、SEEING と「見ること」を起点領域とするメタファーが共通している。これらは、何かを見ることによって、それに関する多くの情報が得られるという日常経験が基盤になっていると考えられる。したがってこれは見ることと理解することの共起性に基づく概念メタファーであると言える。

READING と「読むこと」を起点領域とするメタファーも共通している。これらは文章を

<sup>4</sup> Lakoff and Johnson (1980) はメタファーの経験的基盤を experiential cooccurrence (経験的共起性) と experiential similarity (経験的類似性) に分類している。また Grady (1997) は、メタファーを成立させている動機づけに基づいて、メタファーを resemblance metaphor, correlation metaphor, GENERIC-IS-SPECIFIC metaphor の 3 種類に分類している。Lakoff and Johnson の cooccurrence と Grady の correlation はどちらも 2 種類の経験が同時に起こることを指している。



読むことによってその内容を理解できるという日常経験に基づいているので、読むことと理解することという2種類の経験の共起性に基づく概念メタファーであると考えられる。

TAKING IN と「入れること」を起点領域とする概念メタファーも共通している。これらのメタファーでは、「理解」は「物」として概念化された「考え」を自分の中に入れることとして意味づけされている。英語では取り入れる先が明示されていない場合もあるが、日本語の場合はそれは常に「頭」か「腹」である<sup>5</sup>。これらの概念メタファーは何かを容器の中に入れると入れたものがその中に存在するようになるという経験と、何かを理解すると心の中に何らかの考えが生ずるという経験の類似性に基づいて成立したと考えられる。

最後に UNRAVELING と「ほどくこと」を起点領域とする概念メタファーが共通している。絡まったものをほどくことによって、絡みのない整然とした状態が得られるという経験と、理解することによって、混乱していたり漠然としていた考えが筋道だった考えに変えられていくという経験の類似性がこれらのメタファーの動機づけになっていると考えられる。

さて以上が日英語間で共通する「理解」に関する概念メタファーであり、ほぼすべての「理解」のメタファーが両言語で共通している。一方の言語にのみ存在すると思われるメタファーは、日本語の「理解することは区別することである」という概念メタファーである。このメタファーが日本語に存在し、英語には存在しないということを予測するのは不可能であると思われる。また、そのメタファーがなぜ日本語に存在し、英語には存在しないのかということを文化的な側面から説明するのも不可能であろう。しかし、たとえ特定の言語の中に特定の概念メタファーが存在するかどうかを予測することができなくても、また、特定の言語における特定の概念メタファーの有無を文化的側面から説明できなくても、そのメタファーが何らかの経験的基盤によって動機づけられているということは示すことができる<sup>6</sup>。では日本語にのみ存在する「区別」を起点領域とする概念メタファーはどのような経験的基盤を持っているだろうか。あるものとあるものが別のカテゴリーに属するという認識するためには、それぞれがどのようなものであるかを認識しなければならない。すなわちカテゴリー化という認知的な営みには、必然的に理解が伴う。したがって、理解することと区別することの共起性がこの概念メタファーの動機づけになっていると考えられる。

## 5. 結論

本稿は、「理解」という概念領域がどのようなメタファーによって概念化されているかということを経験と日本語のメタファー表現を分析することによって考察した。その結果、英語でも日本語でも、「理解」は様々な身体的活動として概念化されていることが分かった。これは、抽象的な概念を具体的な概念に対応づけて理解するというメタファーの一般的特質と合致している。さらにその身体的活動も、捕まえること、握ること、取ること、見ることなど、日英語間で共通するものが多いことが明らかになった。英語と日本語は類型論的に全く異なる言語であるから、この2つの言語で共通する概念メタファーは、どの言語にも存在する普遍的なメタファーである可能性が高い。したがって本稿で明らかになった概念メタファーの共通性は、「理解」という心の営みに対する人間の認識の共通性を示している可能性が高い。さらに Olaf (1995) は、理解ばかりでなく、思考、問題解決、記憶、判断など様々な種類の心的活動に関する英語のメタファー表現を分析し、心的活動全般を概念化する主要な上位メ

<sup>5</sup> 日本語には「心」が「頭」や「腹」に存在すると見なす概念メタファーがある。この点については松井(2007)を参照。

<sup>6</sup> メタファーに関する予測可能性と動機づけの問題に関しては Kövecses (2010: 86) を参照。

タフアーとして MENTAL ACTIVITY IS MANIPULATION を提案しているが、本稿の日本語のメタファーの分析の結果から考えれば、この上位メタファーも普遍的である可能性が高いといえる。本稿では心的活動の中でも「理解」という営みに焦点を当てて日英語の概念メタファーを考察したわけであるが、今後は他の種類の心的活動に関する日本語の概念メタファーや、心的活動に関する日英語以外の言語の概念メタファーを考察することにより、「心」という抽象的で捉え難い対象を人間がどのように理解しているかということをさらに明らかにできるであろう。

## 参考文献

- Deignan, Alice (1995) *Collins cobuild English guide 7: Metaphor*. London: HarperCollins.
- Grady, Joseph (1997) A typology of motivation for conceptual metaphor: Correlation vs. resemblance. In: Raymond W. Gibbs, Jr. and Gerard J. Steen (eds.) *Metaphor in cognitive linguistics: Selected papers from the fifth international cognitive linguistics conference*, 79-100. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Hornby, Albert Sydney (2010) *Oxford advanced learner's dictionary of current English*. Oxford and New York: Oxford University Press (eighth edition).
- Kövecses, Zoltán (2000) *Metaphor and emotion: Language, culture, and body in human feeling*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kövecses, Zoltán (2005) *Metaphor in culture: Universality and variation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kövecses, Zoltán (2010) *Metaphor: A practical introduction*. Oxford and New York: Oxford University Press (second edition).
- Lakoff, George (1993) The contemporary theory of metaphor. In: Andrew Ortony (ed.) *Metaphor and thought*, 202-251. Cambridge: Cambridge University Press (second edition).
- Lakoff, George, Jane Espenson, and Alan Schwarts (1991) *Master metaphor list*. <http://araw.mede.uic.edu/~alansz/metaphor/METAPHORLIST.pdf> (second draft copy)
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- 松井真人 (2007) 「メタファーの経験的基盤に関する一考察—「心」の存在場所に関する日英語のメタファーをめぐって—」『山形県立米沢女子短期大学紀要』42: 37-44.
- Olaf, Jäkel (1995) The metaphorical concept of mind. In: John R. Taylor and Robert E. MacLaury (eds.) *Language and the cognitive construal of the world*, 197-229. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- 大野晋・浜西正人 (1981) 『角川類語新辞典』東京: 角川書店.
- 柴田武・山田進 (2002) 『類語大辞典』東京: 講談社.